

# Redburn と失なわれた永遠の世界

水 木 慶 子

## — I —

Melville の *Redburn* は、鋭い感受性を持つ、十代の少年 Redburn の目に、世界がどのようなものとして映ったか、そのまだ柔らかな心にかかる影響を及ぼしたかを、今は成人した本人の口から語らせたものである。（以下、登場人物である少年 Redburn を単に Redburn と、成人しこの物語を語っている Redburn を語り手と呼ぶことにする。）

物語は、Redburn が船乗りになるために、母の家を出発するところから始まる。しかし、彼は必ずしも少年らしい希望に胸ふくらませて海へ出てゆくのではない。彼の父は裕福な商人だったのだが、仕事に失敗してすでにこの世の人ではなく、それ以来、一家はごくつましい生活を送っている。それゆえ、彼が海に出てゆくのも、むしろ、‘young mounting dreams of glory’<sup>1</sup> が一つとして故郷では実現できなかったからに他ならない。Redburn の若い魂はすでに ‘mildew’（べと病）におかされており、そのために出来た ‘scar’ は、天国の空気をもってしてもいやすことが不可能なほど深い。そして、目の前にひろがる世界を、彼は次のような言葉で表現している。

It was early on a raw, cold, damp morning toward the end of spring, and the world was before me; stretching away a long muddy road, lined with comfortable houses, whose inmates were taking their sunrise naps, heedless of the wayfarer passing. (p. 11)

この一節にあらわれている Redburn の疎外意識は強烈である。人々は気持ちの良い家の中でまだまどろんでいるというのに、自分は ‘wayfarer’（旅人）、‘castaway’（のけ者：p. 11）として ‘a long muddy road’（長いぬか

るみの道)を歩んでいかなければならないのだ！

さて、Redburn はややもすると desperate な行動に走りそうになる気持ちを抑えつつ、まず、New York に出て、そこから Liverpool 行きの船 The Highlander に乗り組んだ。船が、いざ大海にのり出さんと the Narrows (New York 港に通じる、Staten Island と Long Island との間の海峡)を通り抜けている時、彼の目はふと右手の岩壁の上にそびえている 'a great castle or fort' (とりで) に吸い寄せられる。幼い日に、今は亡き父と叔父に連れられてここを訪れたことのある彼は、限りない郷愁をもってその時のことを思い出す。

On the side away from the water was a green grove of trees, very thick and shady; and through this grove, in a sort of twilight you came to an arch in the wall of the fort, dark as night; and going in, you groped about in long vaults, twisting and turning on every side, till at last you caught a peep of green grass and sunlight, and all at once came out in an open space in the middle of the castle. And there you would see cows quietly grazing, or ruminating under the shade of young trees, and perhaps a calf frisking about, and trying to catch its own tail; and sheep clambering among the mossy ruins, and cropping the little tufts of grass sprouting out of the sides of the embrasures for cannon. And once I saw a black goat with a long beard, and crumpled horns, standing with fore-feet lifted high up on the topmost parapet……. I can see him even now, and though I have changed since then, the black goat looks just the same as ever; and so I suppose he would, if I live to be as old as Methusaleh……. Yes, the fort was a beautiful, quiet, charming spot. I should like to build a little cottage in the middle of it, and live there all my life. It was noon-day when

I was there, in the month of June, and there was little wind to stir the trees, every thing looked as if it was waiting for something, and the sky overhead was blue as my mother's eye, and I was so glad and happy then. (pp. 35—36)

‘fort, の奥深く抱かれたこの庭には、日の光がさしこみ、緑の草が芽ぐみ、平和で幸福な母牛と子牛の姿がある。母牛は若木の陰で静かに草を食っており、自分の尾を捕えようとはね回っている子牛の姿はいかにも幼く無邪気である。たとえ、外界で何千年経過しようとも、「時」は、この庭においては静止しており、ここにいる者は誰であろうと永久に変化を受けず、‘looks just the same as ever’なのである。そして、この情景の美しい調和は、それを ‘watch over’ (守る : p. 140) している者の存在を感じさせる。

ところで、はね回っている子牛の姿は、そのまま、その頃の幼い Redburn の姿だと言える。その頃は父が生きていた。しかも、父は Redburn の目には完全無欠な人間、自分が手本とすることが出来るような人間 (‘I always thought him a marvelous being, infinitely purer and greater than I was, who could not by any possibility do wrong or say an untruth. : p. 34) と映っていたのだった。このような父に守られて母も ‘bright and happy’ (p. 36) であったし、Redburn 自身も幸福で、あの子牛に劣らぬほど無邪気でもあったのだ。<sup>2)</sup>

ところで、*Moby-Dick* の Ishmael は次のようなことを言っている。  
……human infants while suckling will calmly and fixedly gaze away from the breast, as if leading two different lives at the time; and while yet drawing mortal nourishment, be still spiritually feasting upon some unearthly reminiscence; (p. 386) <sup>3)</sup>

この ‘some unearthly reminiscence’(遠く捨ててきたかなたの世界の追想)のためでもあろうか、ごく幼い子どもの頃には、世界は調和のとれたものに見えるのである。‘fort’ に守られた庭の情景によって Melville があらわそ

うとしたものは、子どもが抱く世界のイメージ——調和のとれた永遠の世界のイメージ——であると言えよう。そして、それはまた、Melville が *Moby-Dick* において、Ishmael に 'one insular Tahiti' というイメージで表現させようとしたものでもある。<sup>4)</sup>

……as this appalling ocean surrounds the verdant land, so in the soul of man there lies one insular Tahiti, full of peace and joy, but encompassed by all the horrors of the half known life. God keep thee! Push not off from that isle, thou canst never return!

Ishmael は 'Push not off from that isle' (その島から飛び出すなかれ) と忠告しているが、これは不可能なことである。なぜなら子どもはいつまでも子どもであるわけにはいかず、いつかは必ず 'life's ocean' (人生の海: *Redburn*, p. 248) へ船出してゆかなければならないからである。この庭の描写にも、ほどなくここから出ていかなければならないというイメージがこびりついている。例えば、この庭では「すべてのものがあたかも何かを待っているかのように見えた」('every thing looked……') のであり、庭を囲む胸壁の上には、自分たちの船出を待ってじっと海をながめている少年たちの姿が見えるのである (p. 36)。そして、いったん 'life's ocean' へ船出してしまえば、もう二度とこの庭へもどることは出来ない——二度と、子どもの時に抱いたような調和ある永遠の世界のイメージを取りもどすことは出来ない——のである。それほど、少年が接する現実の世界とは荒々しいものなのであるから。*Mardi* 中の Babbalanja はこう言っている。

……though with rapt sight in childhood we behold many strange things beneath the moon, and all Mardi looks a tented fair—how soon every thing fades. (p. 619) <sup>5)</sup>

*Redburn* の 'life's ocean' への船出は、彼の父が死んだ時に始まった。この時から、彼の抱いていた調和ある世界のイメージがくずれ始め、それに代わって、世界が前述したような 'a long muddy road' と認識されるようにな

ったのである。しかし、家を出るまでは母の力により、ある程度世の荒波から保護されていた。ところが、今は、その母の保護さえも失ってしまったのであって、今度こそ本当の意味での旅立ちと言えるのである。それゆえ、ここで Redburn がほとんど異常なまでのメランコリイに襲われているのも (p. 33) 不思議ではあるまい。

だが、調和ある世界のイメージがくずれ始めているとはいえ、Redburn はまだ完全なる misanthrope ではない。彼は、海や外国に対しては少年らしいロマンティックなあこがれを抱いている。そして、彼にとって、この二つのものは他ならぬ父の思い出に結びついており<sup>6)</sup>、そこへ旅することはすなわち、いなくなった父を探し出し調和ある世界を再び手に入れようという無意識の試みなのであるから。

このようにして Redburn の旅は始まったのだが、そもそも始めから、それはあまり希望の持てる旅ではなかった。良家の出であり、船乗りとして無経験の彼は、他の連中からいじめられ仲間はずれにされてしまう。おまけに、彼が無意識のうちに捜し求めている父はなかなか見つからない。話が前後するが、Redburn が初めて the Highlander を訪れた時、彼には父親代わりに Mr. Jones が同行していた。Mr. Jones は、Riga 船長の心証をよくしようと、Redburn の家柄のよいこと、金持ちの親類が多いことなどを長々と述べたてるのだが、そのためにかえって Redburn は、是非とも必要としていた前金を払ってもらえなくなってしまう。Mr. Jones は、いわば、無能な父親なのである。また、Redburn は、この最初の出会いの時にいかにも親切そうに頭をなでてくれたりした船長に、父の姿を求める。彼は、‘with peculiar emotions, almost of tenderness and love’ (p. 68) で船長をながめ、船長が自分を保護してくれる (‘he would in some special manner take me under his protection;’ p. 67) と信じて疑わなかった。ところが、いざ海に出てみると、船長は Redburn を完全に無視し、きわめて冷い父であることが判明する。

だが、これらの事は、Liverpool での決定的な体験の前奏曲にすぎない。Redburn の父はかつて Liverpool を訪れたことがあり、息子にこの町のガイドブックを残していった。幼い頃からこのガイドブックを非常に大切にしていた息子は、これを頼りに、町を見物しに出かける。ところが、彼は、ガイドブックにのっている場所をほとんど一つとして実際に見つけることが出来ない。父が泊った Riddough's Hotel はとうの昔に取りこわされているし、The Old Dock は、何と、税関に変わってしまっていた。そして、突然、啓示のように、ある考えが彼の頭にひらめくのである。「この貴重なガイドブックは、ほとんど無用に等しいのだ！」(p. 157) と。この世はあの 'fort' の中の庭と違って 'moving world' (p. 157) なのであり、五十年前のガイドブックが今使えるはずがないのだ。ところで、ガイドブックとは一体何であろうか。それは、父が子に残していった人生の道しるべ（世の中でどのように生きていったらよいか）に他ならない。が、この道しるべさえ役には立たなかった。Redburn は、今や父が本当に死んでしまったこと、('he had gone whither no son's search could find him in this world': p. 155), 自分が孤児であること ('miserable boy ! you are indeed friendless and forlorn' : p. 154) を痛感する。そして、これからは父のガイドブックではなく、自分自身を頼りに旅していかなければならないと悟るのである。

Put it (the guidedook) up, Wellingborough, put it up, my dear friend ; and *hereafter follow your nose throughout Liverpool* ; it will stick to you through thick and thin: and be your ship's mainmast and St. George's spire your landmarks.

(p. 159. なお、以下、引用文中の断りのないカッコ内の書き入れやイタリック体の使用は筆者による。)

かくして Redburn の旅は続けられるのだが、彼が旅で目撃する光景はいずれも父の死を裏書きするようなものばかりである。Liverpool の市内で郊外で、貧しい孤児 Redburn は疎外される。しかし疎外されているのは、何も自分だけではないことに彼は気づく。彼が属している「船乗り」という階級は、その階級全体が疎外されている。語り手は言う、「船乗りとは、ちょうど、ぜいたくな馬車に乗っている人を運ぶために、永久にどろの中で回転し続けなければならない車輪のようなものである」(p. 139)と。船乗りは世界を回っていろいろな品を故国の人々に運んでくるが、自分たちはその恩恵にあずかることもないばかりか、一般から白い目で見られるのである。彼らは 'orphans without fathers or mothers' (p. 47) であり、 'a neglected step-son of heaven' (p. 140) である。彼らが入り出す Liverpool の界隈は 'Rotten-row' と呼ばれ、そこには 'sooty' な家が立ち並び、悪と病気がはびこっているのを Redburn は目のあたりに見る (p. 191)。ところで、このあたりに、'fort' の跡に立てられたという居酒屋 the Old Fort Tavern がある。その名から、当然、例の 'fort' の庭が連想されるのだが、あの庭の子牛が保護され無邪気で幸福であったのとは何という違いであろうか。the Old Fort Tavern は酒場であり、そこで酔った水夫によって売春婦が殺されるという事件がおこる。居酒屋の子牛たち(水夫と売春婦)は孤児であり、けがれはててしまっていることを Melville は示している。

また、ドックの近くには、船乗り以外にも多くの貧しい見捨てられた入々がいた。ある日、この付近の通り、Launcelott's-Hey を歩いていた Redburn は、 'the low, hopeless, endless wail of some one forever lost' (永久に道に迷って救われる見込みのない人の、絶望に満ちた低い嘆きの声 : p. 180) を耳にする。

It was but a strip of crooked sidewalk where I stood; *the dingy*

*wall was on every side, converting the midday into twilight; and not a soul was in sight. I started, and could almost have run, when I heard that dismal sound. It seemed the low, hopeless, endless wail of some one forever lost. At last I advanced to an opening which communicated downward with deep tiers of cellars beneath a crumbling old warehouse; and there, some fifteen feet below the walk, crouching in nameless squalor, ... was the figure of what had been a woman. Her blue arms folded to her livid bosom two shrunken things like children, that leaned toward her, one on each side. (p. 180)*

昼間の光をうす明りに変えるほどの高い壁に囲まれた、古い建物の奥深くに母と子が隠されているという設定は、あの‘fort’の庭を思いおこさせる。だが、あの庭を支配していたような平和、幸福、健康、無垢、調和などは、この地下室にはかけらもない。ここの母と子は一面の緑の中にはなく、汚濁（‘nameless squalor’）の中にうずくまり、飢え、苦悩のうめき声をあげている。しかも、子どもたちは、罪の中に生み落されて、生まれた時から父を知らぬ父なし児なのだ<sup>7)</sup>。‘how do we hope to be saved?’（我々は一体救われる見込みがあるのだろうか）と Redburn はうめく。

この地下室の母子のイメージは、Redburn が帰国の旅で目にすることになる、America への移民のイメージに重なってくる。貧乏な彼らは、高い運賃が払えないため、‘bales of cotton’（p. 241）のように狭い三等船室に詰めこまれて海を渡らなければならない。この‘noisome confinement’（p. 286）と飢えのため、やがて熱病が猛威をふるい始める。デッキの下の三等船室からは、ちょうど Launcelott’s-Hey で聞こえてきたような ‘a subterranean wailing and weeping’（p. 241）が聞こえてくる。そして、そこへ降りていった Redburn の目に映ったものは、病気とよれた空気、ひしめきあっている男女と母にパンをせがんでいる子どもの姿であった。やがて死亡者がで



るが、その多くは男であり、妻は夫を失い、子は父を失う。中には父の死と同時に誕生する生まれながらの孤児もある。‘The first cry of one of these infants, was almost simultaneous with the splash of it's father's body in the sea.’ (p. 289) そして、あとに残された者の悲しみは深い。‘……with the poor and desolate, grief is no indulgence of mere sentiment, however sincere, but a gnawing reality, that eats into their vital beings;’ (p. 290)

さて、今までに Redburn が見てきた人々は船乗りにしろ、Liverpool の食しい人々にしろ、移民にしろ、皆、人間社会において疎外されている人々——馬車の車輪——であった。それでは、馬車の上の人々はどうであろうか、彼らは ‘fort’ の庭の子牛の如く幸福なのであろうか。

こういった人々は、‘the wants and woes of fellow-men’ に取り囲まれながらもそれに目をつぶり、‘own pleasures’ (己の快樂) のみを追求する連中である (p. 184)。Redburn は旅の間に、New York へ向かう蒸気船の乗客をはじめとして、Riga 船長、Lord Lovely, Harry, 帰国の旅の一等船客など、この類の人々を実に多く見かける。だが、‘pleasures’ は彼らの魂まで救ってはくれない。表面のきらびやかさ (‘gilded’ とか ‘gold(en)’ という言葉であらわされる) にもかかわらず、彼らには絶えず ‘hollow’ というイメージがつきまとっている<sup>8)</sup>。そして、こういった人々の城ともいえるものが、London で Redburn が Harry の案内により訪れた Aladdin's Palace である。

Aladdin's Palace は、‘a place of opulent entertainment’ (p. 228) であり、始めのうち、Redburn は心を魅かれている<sup>9)</sup>。ここの一室は、まるで ‘fort’ の庭をかたどって作られたもののように見える。

The walls were painted so as to *deceive* the eye with interminable colonnades ; and groups of columns of the finest Scagliola work of variegated marbles…… supported a resplendent fresco

ceiling arched like a bower, and thickly clustering with *mimic* grapes. Through all the East of this foliage, you spied in a crimson dawn, Guido's ever youthful Apollo, driving forth the horses of the sun. (p. 228)

「いろいろな色をした見事な模造大理石の林」('groups of columns……') はあの庭の若木であり、「きらきらと輝くフレスコの天井」('a resplendent fresco ceiling') は青空、「模造のぶとう」('mimic grapes') は木の葉にあたる。しかし、残念なことには、これらはどれも、'mimic' (模造の、にせの) であり、この庭は 'fort' の庭に似てはいるがにせ物であることが、Melville により暗示されている。Redburn は敏感にこのことを感じとって、だんだん落ち着かない気分になってくる。この場所は 'infected' (p. 233) のように見え始め、やがて、彼は、Aladdin's Palace の本質—— 'gilded and golden' 'serpent of vice' (金メッキをほどこされて金色に輝く悪のへび) ——を見抜く。

But……spite of the metropolitan magnificence around me, *I was mysteriously alive to a dreadful feeling which I had never before felt except most squalid haunts of sailor iniquity in Liverpool.*

All the mirrors and marbles around me seemed crawling over with lizards; and I thought to myself, that though gilded and golden the serpent of vice is a serpent still. (p. 234)

'pleasures' を追い求めることによって、幼年時代に住んでいた 'fort' の庭にもどることは出来ないのであって、こういった人々も船乗りと同様、悪と病にとりつかれた迷い子なのである。そして、Aladdin's Palace の床にこだまする足音、'that hollow boding sound which seemed *sighing with a subterranean despair*' (p. 228) は、彼らの魂の空虚さと絶望をあらわしている。

以上のように、Redburn がこの旅で見たものは、幼い頃に抱いていた 調

和ある永遠の世界のイメージとは似ても似つかない光景、父は死に、母は無力であるような、多くの迷い子——悪に染まり、病み、苦悩している——の姿であった。そして、彼は、このような状況は何も Liverpool に限られたものではなく、広く世界的な状況であることに気づくのである。Redburn が初めてあこがれの地 Liverpool (England) に着いた時、彼はこの町が驚くほど New York (America) に似ている<sup>10)</sup> (特に、‘dingy’=うすぎたない、くすんだ’ という点で<sup>11)</sup>) のを見て、愕然とする思いであった。Liverpool をよく知るにつれて、この印象は強まるばかりであり、ついに彼は、世界はどこでもみな同じなのであって、旅をしても甲斐がないと叫ぶ。

I began to think that all this talk about travel was a humbug; and that he who lives in a nutshell, lives in an epitome of the universe, and has but little to see beyond him. (p. 203)

そして、Redburn が泊っている宿屋の壁紙に描かれている絵は、この事態の象徴である。部屋は「長く、狭く、小さい。」小さな窓から見はらせるものといえ、*‘a smoky, untidy yard, bounded by a dingy brick-wall,* であり、通りからは *‘a confused uproar of ballad-singers, bawling women, babies, and drunken sailors’* が聞こえてくる。ところで、部屋にぐるりとはられた壁紙には、*‘an endless succession of vessels of all nations continually circumnavigating the apartment’* (p. 133) が描かれている。これらの船はどんなに頑張ろうとも、永久にこの狭い部屋をぐるぐる回るばかりで、そこで見、聞くことのできるものしか見たり聞いたり出来ない。まさにそれと同じように、人間もまた、世界中を航海して回っても、輝きを失った世界と父のいない人々の混乱した叫び声以外のものを見ることはないのだ、と、Melville は暗示している。それゆえ、世界のどこかに夢の国を求めても幻滅をあじわうだけである。ちょうど、Redburn が England に失望したように、Harry と Ireland からの移民は America に失望するのである<sup>12)</sup>。

このように輝きを失い混乱した世界であっても、いつか秩序と調和が回復する見込みがあるのなら、いくらか希望が持てる。だが、Redburn の中には、「時」と共に世の中は進歩する（‘the march of improvement’: p. 159）という考えがまだ残っている一方、ガイドブックの無用さを悟った時に、『「時」は進歩性を失っており、常に動き続けてはいるが、その動きはある目的に向かってなされているのではない』という観念が生まれ始めたのである。

This world, my boy, is a moving world; its Riddough's Hotels are forever being pulled down; *it never stands still; and its sands are forever shifting.* (p. 157)

ここにおいて、Redburn が持っていた調和ある世界のイメージは、ほぼ完全にくずれ去ったと言えよう。我々は世界中を旅しようとも父を失った迷子に出会うばかりであり、しかも、将来、この状態が改善される見込みさえもきわめておぼつかないものなのだ。さて、ここで「父」とは一体何なのかを考えてみる必要がある。Redburn においては、父とは、子を ‘watch over’（守り）‘tenderly care for’（やさしく世話する：p. 140）者である。また、同時に、その言動が完全で、子が模範と出来るような人物であり、子にガイドブック（人生の道しるべ）を与える人物である。つまり、父とは、単に子を保護するだけでなく、子のために世界を意味づけ価値づけ整然としたものにする力——「神」と言いかえてもよく、事実、語り手は ‘God is the true Father of all’ (p. 140) と言っている——なのである。それゆえ、父がいない、死んでいるということは、世界を意味づける力が喪失していることであり、世界は脈絡を失ったあるがままの世界と化している。Redburn が果してここまでの認識を持ったかどうかは定かではないが、少なくとも、ぼんやりと感じとってはいただろう。そして、これまでの考察から、このような世界認識こそ、この作品を書いていた頃の Melville 自身の認識であったと言えるのである<sup>13)</sup>。このような状況のもとでは、人間は、あるがままの混沌とし

た世界を自力で構成し直さなければならないのだが（‘follow your nose’），その術を知らず，迷い子になってしまう。Redburn が出会うイタリア少年 Carlo の姿は，Melville の見た人間すべての姿の象徴である。

Carlo was his name, a poor and friendless son of earth, who had *no sire*; and *on life's ocean was swept along*, as spoon-drift in a gale. (p. 248)

### —Ⅲ—

さて，Melville のこのような世界認識は，The Highlander の水夫 Jackson において絶頂に達し，一つの行動を生み出すこととなる。Jackson は孤児の代表と言えるような人物である。彼は八才の時から海に出た ‘castaway sailor’ (p. 275) であり，孤児の持つすべての特徴（病におかされ，悪に染まり，苦悩している）を備えている。が，多くの孤児が自分たちのおかれている状況の真の意味に気づかないのに対し，Jackson はそれを認識している。船乗りとして ‘the worst parts of the world’ (p. 57) で目にした悪の様相と，彼が世の中からこうむった ‘some dreadful harm’<sup>14)</sup> は，「生まれつき驚くほど利口な」（‘by nature a marvelously clever, cunning man’: p. 57）彼に，この世の真実の姿（この世には意味も価値もない）を悟らせたのである。

...during the long night watches, (Jackson) would enter into arguments, to prove that there was nothing to be believed; nothing to be loved, and nothing worth living for; but every thing to be hated, in the wide world. (p. 104)

そして，彼は天国があるなどとはうそ（‘lie’）であり，人は死んだら，ただ ‘one gale of wind’ から ‘another (gale of wind)’ へと移ってゆくだけのことなのだというが (p. 104)，これはこの作品中でもっとも懐疑的な言葉

である。

このような世界認識の結果、彼は天と人への反逆に走る<sup>15)</sup>。だが、白鯨という有限な生きた対象に、Adam 以来全人類を苦しめてきた悪の力の象徴を見出し、それに向かってあらん限りの憎しみをぶつけた Ahab とは違って、Jackson の反逆は定まった目的、対象を持たず、ただいたずらに自己と他人を傷つけるのみである。Melville は、Jackson においては、ただ Ahab 的可能性を持つ人物の輪郭を示しただけにすぎず、反逆者の行動が真の意義を持つようになるためには我々は Ahab の出現を待たねばならない。

さて、上述のような生き方をする Jackson に対し、ほぼ同じような世界の本質を垣間見た Redburn は、如何なる生き方をしてゆくのだろうか。Redburn の生き方の第一の特徴はそのしたたかな生命力にある。この旅の間に、彼が家から着てきた狩猟服（昔の幸福な時代の遺物）は消えてなくなるのではないかと思えるほどにちちんでしまうのだが、服の下にある彼の ego は少しも影響を受けない。

But I hugged myself in my miserable shooting jacket, when I considered that that degradation and shame never could overtake me;  
(p. 75)

この強さのおかげで、Redburn は一人前の船乗りとなったばかりではなく、Liverpool への航海が終わった後も、さまざまな危険をかいくぐって生きながらえているのである (p. 312)。

このような Redburn の生命力からは、当然、行動のエネルギー（社会に働きかけ、それを変革するようなエネルギー）が生まれてくることが期待される。事実、物語の始まりの部分で、蒸気船の乗客に銃を向けたり、他の水夫たちに抵抗したりする Redburn の姿を見ていると、彼が、そのうちに社会に対し何らかの行動をとるのではないかと思えるのである。また、Redburn には、行動する Jackson や Ahab と共通したイメージが使われていることもこの印象を強める。が、Redburn が何らかの行動をおこすのは始め

のうちだけで、彼の行動力は結局内に秘められたもので終わってしまう。彼は「行動する者」「社会に働きかける者」というよりは、社会の「観察者」であり「アウトサイダー」なのである。そもそも旅に出る時から、彼は自分を‘castaway’と意識している。蒸気船の中で、彼は、きらびやかな乗客（自分の‘pleasures’のみを追求する人々）の中であって孤立している：‘I sat apart, though among them.’ (p. 12)。それは彼の貧しさゆえであり、また、彼らの空虚さを見抜く彼の目ゆえである。そして、the Highlander に乗船すれば、今度は、彼の生い立ち、教養が邪魔をして、世の中の‘castaway’である船乗りの中でさえ彼を孤立させてしまう。‘I found myself a sort of Ishmael in the ship, without a single friend or companion’ (p. 62) Liverpool に到着しても、彼はあちこちで追い出され、孤立は深まるばかりである。‘I cared for nobody, no not I, and nobody cared for me.’ (p. 201) と彼は言うが、これは完全なるアウトサイダーの言葉である。Redburnがいくらかでも他人とか社会にかかわりを持ちそうになるのは、Liverpool の郊外の百姓家でお茶をごちそうになった時と、Harry に出会った時である。だが、前者は一時的な事件であるし、Harry との友情にしても、Harry の中にある Aladdin's Palace 的な要素のため、彼と一体になることが出来ず<sup>16)</sup>、彼を死から救うことも出来ない。そして、物語の最後においては、Redburn は、出発の時と何ら変わらない文無しの‘castaway’にとどまっている。つまり、彼は、終始一貫して、社会を外からじっと見つめる目なのであって、この傾向は旅の間に強まりこそすれ、弱まりはしない。彼は、混沌とした世界に対し、何らの意味ある働きかけもしないばかりか、それにかかわることさえ出来ないのである。そして、今だに‘bachelor’であるという (p. 215) 成熟した語り手 Redburn も、まだどうやらこの状態を脱していないらしい。

Colin Wilson は著書 *The Outsider* の中で、アウトサイダーとは、「毎日、自分の部屋のベッドの上に立って、のぞき穴を使いながら、隣室に去来

する人生を上方から見つめる人間」(p. 2: 傍点筆者)<sup>17)</sup>であり、また、「混沌に気づき」(p. 6), 「事物を見とおすことのできる孤独者なのだ」(p. 11)と言っている。が、また、アウトサイダーは「自分の懷疑……を正しく統制する力を与えてくれる明確な行為を見つけ」なければならない(p. 167)とも言っている。Redburn は、まさしく行為を見い出せないでいるアウトサイダーなのである。

#### —Ⅳ—

ところで、先に、この作品を書いた頃の Melville の世界認識は、ほぼ Redburn のその延長線上にあったと述べたが、それでは一体いつ、Melville の中でそのような認識が生まれたのであろうか。Melville は Redburn と同様、New York の裕福な商人の家に生まれたが、彼が十一才の秋、父が仕事に失敗、一家は New York を去って Albany に移ることとなる。その晩は嵐がふきあれ、Melville は意気消沈した父と二人、Albany 行きの船を一晩中ドックで待ち続けなければならなかった<sup>18)</sup>。多分、この時点ぐらいから、Melville の意識の中でも世界は ‘a long muddy road’ という姿をとり始めたのであろう。それから二年もしないうちに、父は精神に異常をきたして死亡、一家の生活はますます苦しくなった。Melville も仕事を捜したがうまくいかず<sup>19)</sup>、海へ出てゆくことになる。ちょうど Redburn と同じように、この時、Melville は父の不在の事実を痛いほど感じていたに相違ない。そして、この認識こそ、Redburn 的認識の始まりであり、後に、Melville が Hawthorne への手紙の中で述べている ‘the visible truth’ (‘the apprehension of the absolute condition of present things as they strike the eye of the man who fears them not’)<sup>20)</sup> の核であつたろう。さて、航海から帰ってみても、一家の経済状態は相変わらずであった。おまけに、数年後には Melville は今度は父親がわりにいろいろ心配してく



れた兄<sup>21)</sup>の死にあうこととなる。この事件により、Melville の抱いていた父の不在の認識はますます強まり、繁栄するアメリカ社会の中であって、彼は一人、生涯、暗い ‘visible truth’ を見つめ続けてゆくことになる。

それゆえ、Redburn 的な体験と世界認識は、Melville の作家としての原点であったと思われる。Melville の作品群の中には、Redburn 的世界認識を持つ登場人物が多いが、Redburn 以降について言うならば、Melville は Redburn の抱えている問題を *Moby-Dick* の Ishmael に受け継がせてゆくと考えよう。Redburn の世界認識は Ishmael のその原点と考えられるところが多い。例えば、Ishmael は人間のおかれていた状況を ‘Where is the foundling’s father hidden? Our souls are like those orphans whose unwedded mothers die in bearing them,’ (p. 486) と評しているが、これは、Redburn が Launcelott’s-Heys で見た母子のイメージそのままである。また、時の観念にしても、‘There is no steady unretracing progress in this life; we do not advance through fixed gradations, and at the last one pause:……But once gone through, we trace the round again;’ (p. 486) という Ishmael の言葉には、Redburn の echo が感じられる。さらにまた、Redburn は、Liverpool は New York であり、世界はどこでも同じだと悟るが、これはちょうどなぎの時に空と海とが混じりあうように<sup>22)</sup>、それぞれ別個のものが混じりあってカオスになる前兆である。そして、Ishmael にとって、物、世界はまさにこのようなもの（形のはっきりしない混沌）として認識されているのである。例えば、乳のみ児鯨の形について彼は次のように評している。

yet, even in the case of one of those young sucking whales hoisted to a ship’s deck, such is then the outlandish, eellike, limbered, varying shape of him, *that his precise expression the devil himself could not catch.* (p. 265)

このように、Redburn の世界認識が発展しながら Ishmael に受け継がれ

ていることは明白であるが、同時に、Redburn の生き方そのものも Ishmael に受け継がれていると言える。Ishmael は Redburn と同じようなしたたかな生命力を持ち、行動力を内に秘めたアウトサイダー的人物なのであるから。つまり、Redburn は若き日の Ishmael と言えるのであり、Melville は Redburn の問題をすべて Ishmael に背負わせたのである。同様に、Ahab は Jackson の正統な後継者であると言える。Redburn は、若き Ishmael の誕生の過程（Melville 的世界観がどのようにして形成されたか）をいわば内側から描いた作品である。そして、この作品の終りは終りではなく、むしろ、よりスケールの大きな新たな作品の始まりなのである。

#### 注

- 1) Herman Melville, *Redburn His First Voyage* (The Northwestern-Newberry Edition の 1969 年版), p. 10. 以下、この作品からの引用はすべて上の版によるものとする。
- 2) 'Then I never thought of working for my living and never knew that there were hard hearts in the world; and knew so little of money, ……,' (p. 36)
- 3) *Moby-Dick* からの引用はすべて Hendricks House Edition の 1962 年版による。
- 4) 'fort' の中の庭のイメージと Tahiti 島のイメージが同質であることは明白である。どちらも緑におおわれ、平和と喜びにあふれている。また、その地形も似ている。程度の差こそあれ、両方とも海に囲まれており('fort' は Long Island か Staten Island にあると考えられる), 'fort' の中の庭は高い岩壁により、Tahiti 島は高い山により(Northwestern-Newberry Edition の 1968 年版の *Omoo*, p. 114 を参照) 海から保護されている。
- 5) *Mardi* からの引用はすべて Northwestern-Newberry Edition の 1970 年版による。
- 6) Redburn は、幼い頃、父と二人で波止場に立って船が出航してゆくようすをながめていた。また、商用で海外旅行の経験のある父は、よく、彼に、海と外国(特に England)について語ってくれたという。(pp. 4-5 参照)
- 7) 近くにいた老婆は、この母親を次のように非難している。"that Betsey Jennings deserves it—was she ever married? tell me that." (p. 181)

- 8) 例えば, Redburn は蒸気船の乗客の笑い声を評して 'the peculiar hollow ring of their laughter,' (p.12) と言っている。
- 9) 'Almost transported with such princely quarters, so undreamed of before, ...I twirled round a chair,' (p.231)
- 10) The Highlander に乗り組んでいる水夫 Maxは, Liverpool と New York に全く同じような妻を持っていて, 二人の間を定期的に行ったり来たりしている (pp.128—129)。二つの町がよく似ていることは, このエピソードによっても暗示されている。
- 11) 'Looking shoreward, I beheld lofty ranges of *dingy* warehouses, which... bore a most unexpected resemblance to the ware-houses along South-street in New York.' (p.127)
- 12) Harry は America で運命を切り開きたいと望むが, 職は得られず, 結局, 捕鯨船に身を投じてしまう。Ireland からの移民は, Liverpool 出航後まもなく見えてきた陸を America だと思い喜ぶが, これは実は自分たちが出発してきた故国であった。つまり, 彼らがめざしている America は, 実は, Ireland とその本質において何ら変わらないのであり, やがて彼らが失望するであろうことが暗示されている。
- 13) Melville の世界認識は, 特に次の部分に明瞭に示されている。語り手の Redburn は少年 Redburn と同様, 世界の真の姿を垣間見た人物であるが, まだ, 楽天的な部分をも残しており, 例えば, America について次のようなことを言う。  
 On this Western Hemisphere all tribes and people are forming into one federated whole; and there is a future which shall see the estranged children of Adam restored as to the old hearth-stone in Eden. (p.169)  
 「将来, バラバラになっていた Adam の子どもたちは, America において, 一つになり Eden に帰るだろう」というこの一節においては, 「時」は進歩性を回復し, 孤児は, 父と Eden (調和ある永遠の世界) を取りもどしている。多分, このようなことが実現するのが Melville の心からの願いであったろう。しかし, 次章 (34章) で彼は, 語り手に Liverpool に停泊中の the Irrawaddy という船を描写させる。この船には, イギリス人の船長と航海士たちと, インド人の水夫らが乗り組んでおり, 互いの無理解と船上の混乱にはすさまじいものがある。つまり, Melville は, 現実には, 人々が一つとなり Eden に帰るなどということはおとぎ話にすぎないことを示したのであり, 前章の語り手の言葉を否定したのである。
- 14) この 'some dreadful harm' とは, Ahab の片足切断に匹敵するような何かであろう。'He seemed to be full of hatred and gall against every thing and every body in the world; as if all the world was one person and had done him *some dreadful harm, that was rankling and festering in his heart.*'

(p. 61)

- 15) '.....he (Jackson) seemed to run a muck at heaven and earth,' (p. 104)
- 16) yet, ....., I never could entirely digest some of his (Harry's) imperial reminiscences of high life. I was very sorry for this; as at times it.....mad<sub>e</sub> me hold back my whole soul from him; when, in its loneliness, it was yearning to throw itself into the unbounded bosom of some immaculate friend. (p. 223)
- 17) コリン・ウィルソン, 「アウトサイダー」, 福田恒存, 中村保男訳, 紀伊国屋出版, 1957年。
- 18) Jay Leyda, *The Melville Log* (1951; rpt. New York: Gordian Press, 1969), vol. I, p. 45.
- 19) *The Melville Log*, I, p. 85 参照。
- 20) *ibid.*, p. 409. (これは1851年4月16日?付の手紙である。)
- 21) *ibid.*, p. 110. 兄 Gansevoot から Melville の下の弟 Allan にあてた 1840 年 11月26日付の手紙の中で兄はこう言っている: 'Herman is still here—He has been & is a source of great anxiety to me—He has not obtained a situation'.
- 22) *Mardi* の第16章を参照。

(みずきけいこ・本学非常勤講師)